キノコ形土製品について

工藤伸一・鈴木克彦

1　はじめに

青森県を始め東北地方各地の縄文時代の遺跡から茸の形に似た「キノコ形土製品」と呼ぶ遺物が出土している。類似した遺物に「スタンプ形土製品」がある。

キノコ形土製品は、通常後期前葉の十腰内１式に伴うことが多い。しかし、１式というごく限られた時期だけに製作されたものなのか、また、十腰内圏内にだけ出土するものなのか、スタンプ形土製品との関係、という考古学的な研究は十分行われているとは言い難い。当然、この遺物の用途すなわち何のために作られ、使われたかという用途論さえ十分に議論されていないのである。以前、筆者の一人である鈴木はこの遺物が茸そのものを模して作られていることに着眼して、それが縄文時代に茸が食用にされていたことを証明するものである（鈴木克彦1991）という所見を述べたことがある。そこで、本稿で考古学の立場と茸を研究する者が異分野協同でこの遺物を観察した場合、どのような所見を引き出すことができるのか、試考してみることにした。

2　キノコ形土製品の考古学的概要

⑴　時期について

以前からこの遺物は十腰内１式に伴うことは大方に注意されていたが、１式の前後にはないのか、或いは盛行する時期の幅などについては検討されたことがなかった。

青森県階上町野場５遺跡（青森県教育委員会1993）で中期末（大曲１式）から後期初頭（上村式）の類例２点が出土した。時期や共伴土器型式を正確に特定できないが、十腰内１式は出土していないので１式以前のものであることが分かる。１式以後の問題を解く確実な類例はないが、秋田県鹿角市大湯環状列石にも見るので１式を細分した場合その後半には伴う可能性が高い。しかし、２式の確実な類例はまだ無い。しかも、２式ないし２式に平行する時期にはこれに類似したスタンプ形土製品が盛行することから、２式には伴わないと見てもよいという傍証にはなりそうだ。

このように、この遺物は考古学的な観察では、出自（初現時期）は確定できない。中期末から後期初頭としておく。今後の課題である。その終末は、概ね十腰内２式以前、と見てよいであろう。この間、最大の時間幅を考慮すると中期末葉から後期前葉までの４～５型式の間に存在したことになる。

なお、後述するように平安時代の類例が青森県から出土している。

⑵　分布

キノコ形土製品に類似するスタンプ形土製品は、北は北海道から南は関東地方まで見られるが、明かに茸を模したと見られるキノコ形土製品は、現在のところ筆者の知見では北海道函館市石倉遺跡を北限として南は福島県まで知られている。その中でも、最も多いのは青森県で次いで岩手県、秋田県の順になるが、両県でも北部に多いので、質量ともに青森県を中心にした地域に分布すると見て大過ないと思われる。特に、青森県では六ヶ所村大石平遺跡や八戸市丹後谷地遺跡（25点）で多数出土している。

最近、福島県内で行われたキノコ形についての研究（目黒吉明1997、大竹憲治1997）によると、福島県では10遺跡20例のようだ。したがって、分布範囲は函館市から福島県の中に収まるであろう。

⑶　分類（図１）

さて、「キノコ形土製品」を茸の分類学的な視野で詳細に観察すると、その中には茸そのものをリアルに模倣したと思われるものがあることに気づく。これらはいずれも実物の茸ではないので、生物学的に種を決定することはできない。しかし、その形状からある程度の推定は可能だと考える。今まで「キノコ形土製品」は、「茸に似た」という位置付け程度であったが、「茸そのもの」の模造品と思われるものも含まれていると考えるのである。

この遺物について、光井文行（岩手県埋蔵文化財センター1996）は、その形状から、傘の部分が凸状を呈する1類、平状の2類、凹状を呈する3類に分類した。この機械的分類は採用されてよいが、2類が無文のスタンプ形の可能性がないのか、そして、この遺物名が茸を模倣したという観点からすれば、2類は茸とは言い難い。したがって、まず対象を、茸を模倣したと考えられるA型（写実型）と茸の形に類似したB型（類似型）に分別したい。A型は傘の形状によって、a類：凸面のもの、b類：凹面のものに区分でき、光井分類の1、3類に相当する。B型として、a類：茸の形に近いもの、b類：スタンプ形の一種かそのように判断した方がよいもの、に分類したい。A型とB型のa類は茸との関係が考えられるが、B型b類はスタンプ形との関連性を強調したい。例えば、B型b類には傘と柄（茎）の形などの判断から、大型で傘が厚く平らなもの、柄が極めて短いもの、柄に穴が空けられているもの、模様が施されているもの、などが相当し、当然に役割が異なるものであろう。

(4) 用途

この遺物がどのような目的で作られたものなのか、その製作目的である用途の問題が、最も興味深い。これには単なる類推だけではなく、出土状態などの発掘による考古学的な観察に基づいて考察しなければならないことと、それをキノコ形と呼ぶ以上、茸を模したものだというコンサンセスがある訳だから、当然茸そのものを粘土で作った遺物として、食用ないし非食用すなわち毒茸なのかの判断は求められて方法論上問題はない。したがって、この二つの側面からこの遺物を考えることが必要である。

かつては、つまみ（柄に相当する部分）のあるものを「蓋形土製品」とする考えもあった。しかし、同時期に見られるT字を呈する蓋形土製品とは形状、大きさなどが異なるので、同一視できない。発掘では、包含層から出土することが多く、明確に遺構に伴った事例を寡聞にして知らない。となると、現状で観察できることは、その形から茸つまり現在のどのような茸に形が最も似ているか、ということを類推することと何故敢えて茸を模造したのか、という問題を考えて見ることであろう。後者の問題については、茸である以上食用か非食用しかない訳だから、美味で栄養化の高いもの、季節性によって確実に入手可能な食糧資源、或いは食べた結果の犠牲による反面教師的な扱い、などが考えられる。或いは、縄文時代の動物形土製品などのように食糧資源確保の豊穣を祈願するための信仰に関係する遺物と同じような考えを与えることもできよう。いずれにしても、もはやこの問題は茸研究の専門家に委ねることが説得力がありそうだ。（以上は、工藤と協議の上での鈴木の執筆）

3 キノコの歴史と民俗学

(1) 日本の古典に見るキノコ

日本におけるキノコの出現は書き物としては『日本書記』、『万葉集』の歌の中に見られるものが最古で、平安前期の『古今集』にはキノコ狩りの様子が歌われている。十一世紀頃に書かれた『今昔物語』にはキノコによって中毒した話が出現するが、特に幻覚性のキノコを意図して用いた様子は見られない。

(2)古代のキノコの作り物

① 中米マヤ文明のキノコ石

紀元前1,000年頃から中米のグァテマラを中心として栄えたマヤ文明の遺跡からキノコの石像が発見されている。この石像は火山岩などで作られたもので、キノコの下に獣や顔を彫っている。幻覚性キノコ信仰の象徴という見方もあるが、はっきりとしたことは不明である。

② イタリアポンペイ遺跡のきのこの壁画

紀元79年に火山で埋没したイタリアのポンペイ遺跡の壁からアカモミタケと思われる食用のキノコが描かれている絵が見つかっている。紀元50年頃の作りといわれ、壁画としては最古のキノコの絵とされる。

③ 蒙古ノイン・ウラ遺跡のキノコの綴れ織り

蒙古のノイン・ウラ遺跡から発見された綴れ織りに描かれた絵である。考古学者の梅原末治博士によると忍冬（カラクサ）の模様化したものとされるが、この模様はアメリカのキノコ民俗学者G．Wasson博士及び菌類学者小林義雄博士によると「レイシ（霊芝）、つまりマンネンタケだ」という「キノコ画」説があり、こちらが有力である。キノコを扱った綴れ織りとしては最古のものである。

以上がキノコに関する作り物として有名であるが、これらはせいぜい紀元前後のものである。縄文時代のキノコ形土製品は紀元前2,000年頃のものであり、今のところキノコの作り物としては世界最古のものとなる。

⑶ 古代マヤ文明の民俗学

アメリカの菌類民俗学者B．Lowy博士によると、紀元前1,000年頃から中米のグァテマラを中心として栄えたマヤ文明における古写本聖書の中から神に貢ぎ物をしている図を見つけだし、その貢ぎ物をベニテングタケであると推定している。また、キノコ民俗学者G．Wasson博士は、インドのガンジス川流域に定着したアーリアン族に紀元前500年頃に芽生えたバラモン教で幻覚を起こす神の飲み物Somaについて、ベニテングタケであると報告している。

⑷ 現代のキノコ民俗学

G．Wasson博士によると、幻覚性キノコを利用する文化圏は３つあるという。第一は中央アメリカのマヤ・アステカ文化圏であり、シビレタケの仲間を利用している。第二はニューギニア島北部の高地人であり、オニイグチ科のキノコを利用している。第三はシベリア東部の原住民で、ベニテングタケを利用している。いずれも幻覚性のキノコを聖なる食べ物として呪術を行ったり儀式に使ったりしているが、シベリアの原住民では興奮により寒さを防ぐためにも使われている。特に、ベニテングタケは赤い色もあいまって幸福の象徴として飾り物にされている地方が多く世界中に広まっている。中国では古くから霊芝（マンネンタケ）が不老長寿の漢方薬として利用されているほか、縁起物として重宝されている。日本でもベニテングタケを酩酊薬として利用している一地域があるというが、一般的ではない。マンネンタケは中国と同じく不老長寿の漢方薬として利用されているほか、縁起物としての飾り物にされ、また、魔よけとして軒先に吊り下げている地方もある。

4　平安時代のキノコ形土製品

平安時代からは現在のところ青森県浪岡町野尻４遺跡から出土した１点のみである。傘及び柄の部分から形成されており、傘の下面が平面に仕上げられているものの、傘の厚さから考えてひだのあるキノコを模倣したことは明らかであることから、この土製品は「担子菌類ハラタケ目」のキノコを模倣したものと思われるが、傘の部分の造りは単調であり、キノコの識別を意識して造られたものとは思われず、種の推定までには至らない。

平安時代から出土した土製品は、今のところ同時代からの他の出土例はなく、その製作意図を考察するには少々危険であるが、この時代には和歌や物語りに既にキノコ狩りなどが登場し、茸が一般的に浸透していることが推察されるところから、豊穣儀礼や装飾として用いられた要素が強いものと考えられる。

5 縄文時代のキノコ形土製品

(1) 青森県から出土した類例についての茸の分類学から見た所見

これらのキノコ形土製品はいずれも本物の茸を意識して造られているものが多く、かなりの部分まで推定できるものが多い。傘及び柄の部分から形成されていること、更に、傘の厚さ及び形状から推定して「ひだ」または「管孔」のある茸を模倣したことは明らかであり、「ハラタケ目」のきのこを模倣したものであることは確実である。この「ハラタケ目」の茸には、現代、我々が食用としている茸の大部分を占めている。

八戸市韮窪遺跡の類例は傘が丸山形で柄が細く仕上げられ、全体のバランスがよく「ホンシメジ」のようなキシメジ科の典型的なシメジ属の茸を思わせる。柄が傘にやや斜めに取り付けられているが、材に発生しているものではなく、斜面に発生している状態を現している。

六ヶ所村大石平遺跡の類例は、傘がやや反り返った形で傘の下面が柄に垂生状に仕上げられているところから、「ハツタケ」などのベニタケ科の茸と思われる。

六ヶ所村大石平遺跡の類例は、傘の縁が鈍角に仕上げられており、イグチ科の茸を思わせるが、傘の下面が凹状に仕上げられていることから、それこそシメジタイプであろうか。特徴をよく現そうとする意図は感じられるが、種の推定までには至らない。

階上町野場5遺跡の類例は2点ある。一つは傘の部分が平たい丸山形で、全体にやや肉厚、傘の下面の凹状態の仕上げが弱く、イグチ科の茸を思わせるが、種の推定までには至らない。もう一つは傘が肉厚で、キシメジ科の典型的なキシメジ属の茸を思わせる。柄が傘にやや斜めに取り付けられており、斜面に発生している状態を現している。この土製品は特に傘の状態から青森県で知られている「バカマツタケ」によく似ている。

南郷村水吉遺跡の類例も2点ある。どちらもキシメジ科のタイプの茸で、いずれも基部が意識的に曲げられていることは、倒木や枯れ木などに付着していたものを表現していると推測されるが、両者は種類が違うものである。一つは傘の肉が薄く仕上げられており、比較的深い丸山形であることから、「サマツモドキ」のようなタイプのきのこのようである。もう1つは幼菌を模倣したようで、見た目は「シイタケ」のような肉厚のタイプの茸のようである。

(2) 使用目的の考察

従来、キノコは、「食用だけで、幻覚作用をおこすきのこで呪術や祭の儀式に用いられた」と考えられていた。しかし、縄文時代から今まで出土したキノコ形土製品のA型を精査する限りにおいて、その形状は傘の下面の「ひだ」や「管孔」の表現はないものの、種までもを推測できるほどに精巧なものが見受けられる。それはいずれもハラタケ目のキシメジ科、イグチ科、ベニタケ科などの食用茸と思われ、幻覚作用をおこすと思われる茸は見つかっていないので、上記の学説の確証は得られない。また、民俗学的に考察してもこのことは限定された地域の例であり、縄文時代のキノコ形土製品に当てはめるには無理がある。

縄文時代において、茸も当然に貴重な食糧になり得たことは推測できる。しかし、茸の食毒の判断は現代の科学をもってしても先人の貴重な体験によるところがほとんどである。このことは縄文時代

においても例外ではない。茸を食糧としたことによって毒茸による犠牲者もかなり出たものと推測される。茸の種類は１万種を越えるといわれており、中毒を防止するためには茸の中から毒茸を知ることよりも、身近に多数発生する食用の茸を覚える方が確実である。

今までのことから縄文時代のキノコ形土製品は、Ａ型からＢ型ａ類に移行したものと思われるが、Ａ型の目的に限って言えば、現代の『図鑑』に相当するものではないかと考える。茸は腐敗しやすく、植物のように長期にその場に発生してはくれない。また、採取しても原形を止めさせておくことは不可能である。そのため、貴重な体験から食用と判明した茸を模倣し、人々が茸を採集する際などの指針としたのではないだろうかと推定する。結論として村人や家族たちへの伝説の手段、つまり、『縄文版キノコ図鑑』であると推定するものである。

青森県内キノコ形土製品出土例

遺跡名	時代	所在地	点数		文献
野尻４遺跡	平安	浪岡町	1	キシメジ科？	青森県教委　1996
是川遺跡	縄文	八戸市	3		八戸市教委　1972
四ツ石遺跡	縄文	青森市	3		青森市教委　1965
韮窪遺跡	縄文	八戸市	1	キシメジ科ホンシメジ類似	青森県教委　1984
丹後谷地	縄文	八戸市	25	Ｂ型ａ類	八戸市教委　1986
大石平遺跡	縄文	六ヶ所村	5	ベニタケ科類似ほか	青森県教委　1985
野場５遺跡	縄文	階上町	2	バカマツタケ類似ほか	青森県教委　1993
水吉遺跡	縄文	南郷村	2	サマツモドキ、シイタケ類似	青森県教委　1998
上尾駮遺跡	縄文	六ヶ所村	1	傘のみ、キシメジ科類似	青森県教委　1988
鷹架遺跡	縄文	六ヶ所村	1	不完全	青森県教委　1981
近野遺跡	縄文	青森市	1	Ｂ型ａ類	青森県教委　1976

参考文献

伊藤誠哉　1958　深槽録（その１）日本菌学会会報
小林義雄　1983　日本中国菌類歴史と民俗学　広川書店
横山和正、今関六也　1978　幻覚性キノコとキノコ民俗学　週刊朝日百科「世界の植物」116
鈴木克彦　1991　特集・縄文文化のふるさと青森県　青森県暮らしの歳時記　東奥日報社
目黒吉明　1997　キノコ形土製品について　福島考古38
大竹憲治　1997　スタンプ形土製品とキノコ形土製品をめぐって　史峰23
岩手県埋蔵文化財センター　1986　駒板遺跡発掘調査報告書

図１の掲載遺物の出土遺跡

1　青森県八戸市韮窪遺跡
2　青森県南郷村水吉遺跡
3　青森県南郷村水吉遺跡
4　青森県階上町野場５遺跡
5　青森県階上町野場５遺跡
6　青森県六ヶ所村大石平遺跡
7　青森県六ヶ所村大石平遺跡
8　青森県六ヶ所村大石平遺跡
9　青森県青森市近野遺跡
10　青森県八戸市丹後谷地遺跡
11　青森県六ヶ所村大石平遺跡
12　青森県六ヶ所村大石平遺跡
13　福島県原町市羽山遺跡
14　青森県六ヶ所村大石平遺跡
15　青森県青森市近野遺跡
16　青森県青森市近野遺跡
17　青森県浪岡町野尻４遺跡

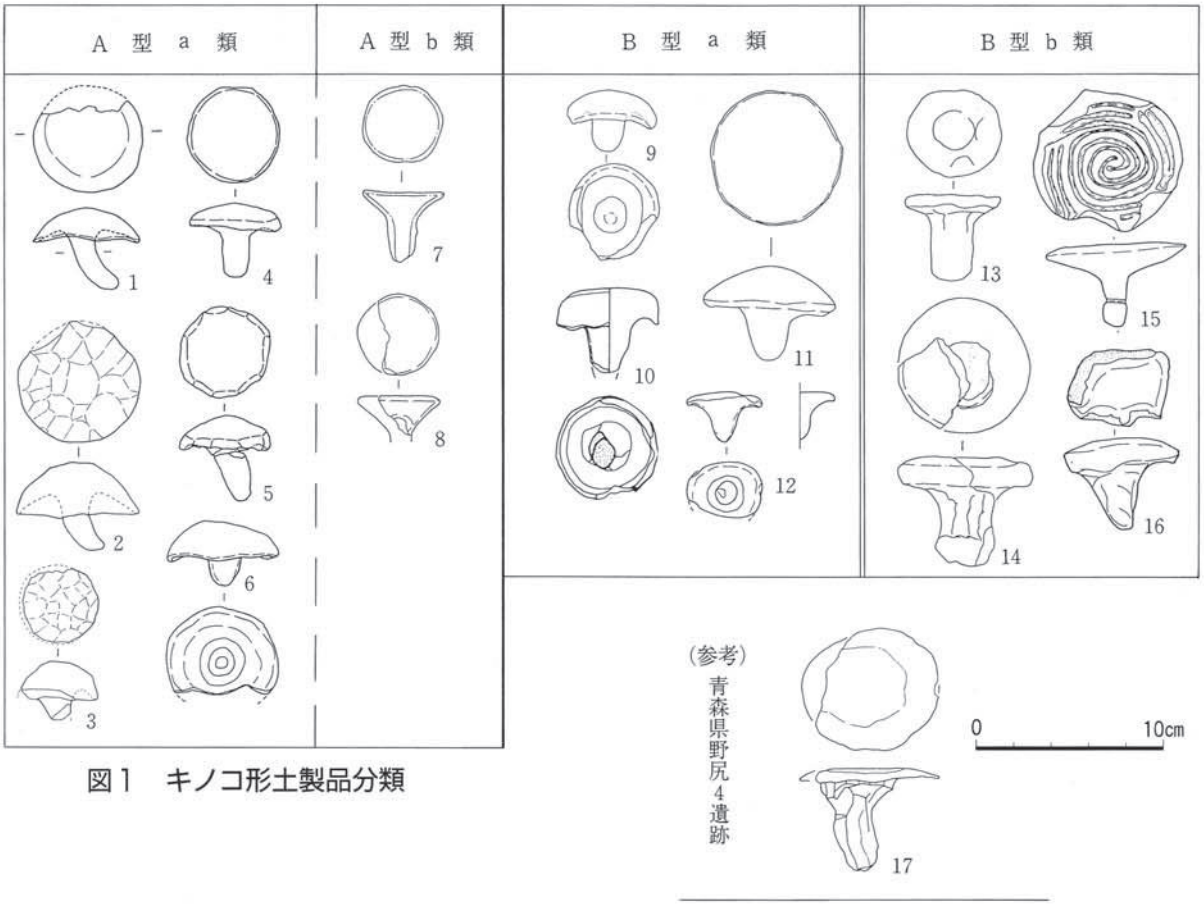

図1　キノコ形土製品分類

写真の出土遺跡
1．青森県南郷村水吉遺跡
2．青森県階上町野場遺跡
3．青森県六ヶ所村大石平遺跡
4．青森県階上町野場遺跡
5．青森県南郷村水吉遺跡

写真　キノコ形土製品の類例